

令和6年3月7日

◆鈴木ひでし委員

最初に、私、この1年間お付き合いさせていただいて、まずちょっとお願いが一つあります。それは、頂く書類、頂く書類の中に、政令市が入っているのか入っていないのかが分からない。だからもう質疑の中とか、またいろんなものを読んでみても、政令市が入っているときと入っていないときでは大分違うだろうと、これは全部明記を今後していただきたいと思いますが、いかがですか。

◎教育局企画調整担当課長

県の取組といたしましては、基本的には広域自治体として、政令市全体を含むべきと考えております。政令市も含めてということを考えておりますけれども、政令市を除く除かないということに関しましては、それぞれの取組ごとに含む・含まないがあると思いますので、明記するかどうか、その辺りにつきましては、検討のほうをしていきたいというふうに考えております。

◆鈴木ひでし委員

数値やまたいろんな施策についてだって、政令市が入っているのと入っていないのとでは大分違うと私は思います。そういう意味では、しっかりとまた明示した上で議論をさせていただく土壌をつくっていただきたいということを、まず1点お願いしたいと思います。

二つ目には、私は議論に入る前に、先日からずっとインクルーシブ教育について、教育長からも熱いお話があった。私はあれを聞いていて、ちょっと3、4点、すごく気にかかることがあるんですよ。一つは、フルインクルーシブ、フルということは、何かが足りないからフルにするんだろう、そうすると、その足りないものは何なの。要するに、インクルーシブ教育を駄目だとは言わないけれども、それをなお補う形でフルインクルーシブと、だってフルという英語は何かが足りないからフルになるんでしょう。そうすると、そのフルというものの足りないものは何なの。だってそれを明確にしなかったら、今まであなた方はインクルーシブ教育を進めてきたんじゃないの、今までずっと。それはどうなのかと、みんなきっと大変な波乱を起こすと思うよ、俺は、これ。だって屋上屋を架すわけだから、要するに、ダブルスタンダードにならないか私は心配しているということよ。あなた方は、一生懸命この資料の中にもインクルーシブ教育を進めると書いてあるじゃん。書いている中に、今度フルインクルーシブですと、私はそれも結構だけれども、フルということは何かが足りないからそうなるんだろうからさ、その足りないものは何なのよ。

◎インクルーシブ教育推進担当部長

足りないものがあるという認識ではないのですが、いわゆるインクルーシブ教育もフルインクルーシブ教育も、本来はインクルーシブ教育というのが、全

ての子供たちが共に学ぶということを本来明記しているものではあるのですが、我々がフルインクルーシブ教育をあえて使ったのは、インクルーシブ教育の推進という形でこれまでも進めてきましたし、もちろんこれからもインクルーシブ教育の推進という考え方は変わらず進めていこうというふうに考えております。

ただその中で、今回、取組を改めて進めていく中で、どうしてもインクルーシブという言葉自体が、様々な解釈とともに国内外を問わず進められている状況があって、その中で、もう一度今回、フルインクルーシブ教育推進市町村という指定をするという取組を考えたときに、もう一度、これはその地域に住む全ての子供たちなんだということを御理解いただくために、具体的に当該の市町村と相談する中で、やはり一定のインパクトを持って皆さんに御理解いただけるような仕掛けはないかということを考えたときに、違いはないんですけども、完全に全ての子供を包摂するという意味でフルという言葉を使わせていただいたと、そういう状況でございます。

◆鈴木ひでし委員

言っていること、全然分からない。全然分からない。この前も、教育長からイタリアの話をされた。でも、イタリアは国がやっていることだよ。市町村がやっているわけじゃないよ、県でもないし。5,600 万か、イタリア、今。そんな全部そういう、私なんか、イメージとしては、もう海老名というところは海老名の支援学校もなくして、例えば、視覚障害、聴覚障害の方も全部そこの中に入れるというのが、私は本来ならば、共生社会を目指すというのなら私は分かるよ。だけれども、今あなた方の施策としては、インクルーシブ教育を進めて、それもまだ緒に就いたばかりなんでしょう。神奈川というところは、リードオフマンとして全国にも名をはせたわけじゃない。そこが今度、施策の途中も行っていないのに、今度はフルですと、じゃフルだったら何が足りないんだよと。これは失礼ですけども、どの人だってみんな思うと思うよ。英語で、俺、少なくともインクルーシブということ自体だって包括とかいろんな意味が入っているんだから、全部入っているという意味で私はインクルーシブとずっと理解してきたわけだよ。それがフルと今度ついて、なおかつ例えば海老名は海老名で市民の方に理解していただくというときに、じゃフルと普通のインクルーシブ、フルとつかないのとでは何が足りないんですかみたいな質問をしたら、当然出てくるだろうと私は思ったものだから。それと同時に、失礼ですけども、セミナーをやったり、例えばオンラインで何かやったからと、じゃフルということは浸透するのか。私は浸透しないと思いますよ、施策だもん。施策というのは、全体を要するに全部包んだ形でもってやるのが施策じゃないですか。それを海老名なら海老名、それも市町村やまた教育委員会の方も了解したのかももしれないけれども、それをパイロット的にとか何とかとやるためには、住民の方もひっくるめたそういうようなものがなければ、うちだけインクルーシブじゃなくてフルインクルーシブなんですかというものになっていかないか、私はすごく恐れたわけ。ダブルスタンダードにならないか、その懸念が要するに、例えば、こんな言い方はいけないけれども、インクルーシブはもう半分以上い

きました、みんなもう神奈川県もすごく理解が進んで、もう一歩進める、共生社会の黒岩さんがよく言う県民目線とかという、そういうものに近づけたいんですとかという理屈だったら私、分かるけれども、緒に就いたばかりのところ、に今度フルも入れるんですかみたいな、それはないんじゃないのと私は思ったので、この御見解をいただけますかね。

◎教育長

過日の委員会でも議論がございましたけれども、フルインクルーシブ教育の中にインクルーシブ教育が内枠で包含されているという理解は、私はしておりません。フルインクルーシブ教育とインクルーシブ教育の概念はぴたり一致している。ただ、言い方として、私どもはあえて造語としてフルという言葉を使わせていただいた。今、委員御指摘のとおり、本県は、他県に比べてインクルーシブ教育についてはかなり先駆けていろいろ動きをしました。全国の集まりの中でも、インクルーシブ教育実践推進校を高校でやっている神奈川はすごいというふうに言われます。

そうした中で、本県としては、高校場面、小中場面でインクルーシブ教育を進めるための体制整備を進めてきましたけれども、ここで先ほど委員が象徴的なことをおっしゃられました。我々としては、将来、遠い将来は、海老名市民の方は誰も特別支援学校に行かなくても同様のサービスが普通学校で提供されると、それが真のインクルーシブ教育だと思っています。ただ、そこへ行くまでには住民の方々、先生方、いろんな理解が必要なので、来年、再来年にそういう体制にはならないだろうという思いであります。

これは前も申し上げたんですが、この名前、海老名を指定する際に、どういう名前にしようかといったときに、じゃフルを使わないでインクルーシブ教育推進市町村として海老名市を指定しますと言ったときに、ほかの市町村はインクルーシブ教育を推進していないんですねと、そういう議論になるだろうと、初めて神奈川県は、33の中で海老名をインクルーシブ教育推進市町村にしましたと、インパクトないよねと。それと、我々の逆に今までインクルーシブ教育をやってきたのは何だったんだという議論が、逆に委員会の中で指摘されるのではないかと、そういう意味もあって、今までのインクルーシブ教育の取組は、そのまま来年も事業を行います。ただ、海老名市については、将来、普通学級で、特別支援学校で処遇を受けなきゃいけないような重たい障害のある方も授業ができるような、そういうことを目指す上で、どういう人員体制、そういったことをしっかり検討していく、住民の方々にも、今まで我が国はこういう二層構造だったものを、できれば共生社会ということで、一つところで同じように子供たちが学ぶシステムをつくりたい、そういう理解を頂きながら体制をつくっていく、そこのある意味モデル的な市町村として、海老名としてやっていきたいと思いますということ、それを象徴的に力強く進めていくために、フルインクルーシブという造語なんですけれども、そういったものをつくらせていただいたという思いでございます。

◆鈴木ひでし委員

教育長、一にやり取りしましょうよ。今、教育長がそうやっておっしゃるんだったら、何で、例えば逆にインクルーシブモデル校とかというようなことに言葉を変えたほうが、私はかえってどういうモデルなんだということが県民に分かりやすいと思いますよ。フルインクルーシブなんかいったって、さっきから言っているように、どんな人だってフルと見たら欠けたんだろうと、何か。それは何と聞きたくなるじゃない、だって普通。それで、なおかつインクルーシブ教育だって実際進めていらして、そこにもう一度屋を架すということはどういうことなんだという、そのためのお金を逆にもっとインクルーシブ教育にかければいいじゃないかという論議だって私はあってもいいと思う。

ここで長くなっちゃうのも、私もそんな時間を持っていないから、教育長には、私はフルインクルーシブ教育というその名前はやめたほうがいいと、私は、その海老名を例えばインクルーシブ教育モデル校、またモデル都市、またモデル教育というような形に、モデルというものに変えた形で、ああ、こういうところを神奈川県は目指しているんだなというふうにしたほうが、私は落ちがいいんじゃないかということだけ、先にお話しさせていただきたいと思います。お願いします。

◎教育長

委員の御指摘、ごもっともかと思います。正直、モデル校というイメージもありましたが、今、県内30市町村に、小中学校に1校ずつモデル校を置いて、インクルーシブ教育を進めるための体制整備をやっているんです。ですから、それとどう違うのかと。ですから、行政目線でいくと、モデル校という取組を今30市町村で1校ずつやっています。今度は海老名に集中的にやっていきたいということなので、モデル校を使うと、今までのモデル校とどう違うのかということになります。ただ、市民の方にとってみれば、行政がほかの市町村でモデル校をやっていて、海老名と、その辺の分かりにくさがありますので、先行会派でも議論ありましたが、これからはフルインクルーシブ教育推進市町村、象徴的な言葉としては使わせていただきますけれども、あくまでも我々がインクルーシブ教育の取組を加速させていきたいという象徴用語として、事業名のようなという御指摘も先行会派でございましたが、そのような捉え方で、あくまでも我々が目指すのはインクルーシブ教育の浸透ということを念頭に置いて、業務を進めさせていただきたいと考えております。

◆鈴木ひでし委員

分かりました。この件については、あまり長くなってしまうと私も次の質問ができないので、そんな形にしましょう。

さて、二つ目は、このいっぱい今回いろんな書類を頂きました中で、かながわグランドデザイン、相も変わらずこの政策局のつくったものは何も変わっていないなと思って私は見ているんですけれども、そもそもが、これは4年間を目指して、教育もこの1のところでもって、プロジェクト2か、これまで出ていますよね。失礼ですが、教育としての4年後の姿というのは、どういうもの

を描いていらっしゃるんですか。どういう時代になると思っていらっしゃるのか。

◎教育局企画調整担当課長

教育といたしましては、実施計画に書かせていただいている、変化の激しい社会に適応できる柔軟で自立した人材の育成、こうしたものを行っていきたいというふうに考えております。

◆鈴木ひでし委員

課長、そういう意味じゃなくてさ、社会がどのようになっていくんだと、教育現場も、教育も。それはもう変化の激しいなんて、毎日激しいよ。どういう社会を描いてこれがつくられたんだと。何が言いたいのかというと、AもBもそんなことを思って出したものなのかなと思ったので聞いただけ。どういうふうに考えているの。だから、激動は分かっているからさ、アメリカだってどうなるか分からないし、ウクライナだってどうなるか分からないよ。だけれども、教育としては4年後どんなことを描いていますとならなかったら、こんなアイテム出てこないじゃん。どういうふうに考えていらっしゃるの。

◎教育局企画調整担当課長

先ほどはちょっと大きな目標についてお話しさせていただいたところですけども、中身をちょっとブレイクダウンさせていただきますと、取組としては二つ考えておりまして、一つは、思いやる力や自立して生き抜く力、また、社会に貢献する力を育成する学校教育……

◆鈴木ひでし委員

いや、そうじゃなくて、だからどういう社会になる、教育現場と教育はどういう環境になっているんですか、私たちにイメージを教えてくださいと言っているのよ、4年後の。それがなかったら書けないじゃない。そもそもが、寄与度というのがないからこんなような書き方になるんだよ。それは失礼ですが、政策局に言わなきゃならないことだから、あなた方に言ってもしょうがないけれども、ここに書いてあることが4年後に、何に寄与するんだというものがなくて、こんなのをつくったって何もならないだろうよ、かながわグランドデザインなんてつくったってさ。あなた方もつくれと言われたからつくったとしか、私は逆に思えない文章しか書いていないよ、だってこれ。どういような教育現場になっているんだ、社会もなっているんだという前提じゃなきゃ、こういうものが書いても施策にならないでしょうと私は言っているんだよ。だから、それをあなたがどう捉えていらっしゃるんですかと課長さんに聞いているの。

◎教育局企画調整担当課長

失礼いたしました。

そうした意味でいいますと、やはり子供たちが将来に夢を持ったりとか、学校生活、そうしたものが楽しく過ごせる、そうしたことがまずは一番ではない

かなというふうに考えております。そうしたことから、指標という形でお示しさせていただいておりますけれども、四つの指標、プロジェクトの達成度、先ほど申し上げた変化の激しい社会というところですけども、それを達成するためにこうした指標を設けまして、子供たちが夢を持つことができるか、また、学校生活を楽しいと思ってもらえるか、そうしたことに力を入れながら取組を進めたいというふうに考えております。

◆鈴木ひでし委員

課長、そうじゃないでしょう。4年後の社会というのは、もう間違いなく生成AIがすごい時代になっていって、多分、今のICTというのだって、とんでもない変化が起こることは間違いないと私は思いますよ。今、要するに、この2年間だって生成AIなんて出てこなかったんだから。突然出てきてChatGPTだ、ああだこうだと始まって、そういう社会になって、フェイク動画が本当に満ちあふれてきて、詐欺等々も、すごい時代が来て、身の安全は自ら自分で守る社会とかって、そういうようなものをイメージされていたら、失礼ですが、こんなアイテムは私は出てこないと思ったのよ。ごめんなさいね。ただただ批判しているんじゃない、これからちょっと論証していきましょう。

一つはインターンシップ、これはそもそもが33市町村の中にあるインターンシップの何につけたいと思っているの。インターンシップだっていっぱいあるよ、産業なんて。失礼ですけども、向こう側の西湘のほうに行ってしまったら、半導体とかIT関係とかというのはそうそうないですよ。そういうところにインターンシップとは何を求めているの、これ。

それと、二つ目。大学受験を目指している方たちにインターンシップを、要するに、強要することがいいことなんですか、教育にとって。失礼ですが、進学校と言われているところと、就職を目指しているそういう学校と、そこがきちっと分かれていたのなら、こんな乱暴な万人目指しますなんていうのは、表は出てこないんじゃないの。私、そのことを聞きたいと思っているのよ、一つは。だって、そもそも私なんか、専修学校の方々ともお話しする、なかなか県の教育委員会からは協力を得られないと言っているよ。8月頃やっているんだって、自費でもってやってくださってるよ。そこにだって生徒の数はそんなに来ていない。特に失礼ですが、進学校のところは来ていない。その人たちにインターンシップと簡単に言うけれどさ、言葉は劣るけれど、いろんな企業があって、いろんな人がある中に、失礼ですけども、第三次産業がないところ、第一次産業しかないところ、そういうところでインターンシップを一生懸命やって、万人にしたから社会がどうなるのよ、これ、学校現場が、また生徒さんが。そういうところをあなた方が、申し訳ないですけども、こういうような数値を出してくること自体が、もうこのグランドデザイン自体がもうむちゃくちゃだと私、言っているのよ。それはここで教育の皆様方に言ってみてもしょうがない、ここの中に入れなきゃいけないんだから。だけれども、それにしても選んだのは違うんじゃないのかというのが一つ。

課長にあまりこれを言うといけない、二つ目は、人が困っているとき進んで助けるとか、例えば、この後、中学生の時よりも人を思う気持ちが身についた

と、これだって、お一人お一人の心の中ってさ、何ではかるの、これ。だって、私ども人を思う気持ちが身につきました、ああそうですかという調査なの、これ。それとも、困ったら助けますと。だって、そもそも助けますって、困っている人が前にいたら、助けたいんだけど、TPOが分からなくて、そういうところで助けられないという人もいっぱいいる。お気持ちはあるけれども、その気持ちはあるけれども、そういうようなことをどうしたらいいのかという人はいっぱいいるじゃない、今、大人だって。そういう中で、このいきなり100%を目指すみたいなこういうのとか、私なんかから見てみると、92とか93、ばつと見させてもらいました。そうしたら、これを見ていて私びっくりしたのは、高校生のいろんなキャリア教育とか、よりブレイクダウンしたら出ているよね、ここね。特色と魅力ある県立高校づくりのアンケートというのは、これを指しているんですよ。この中で、例えば、課長さんさ、この5ページ、キャリア自立のための、こっちじゃない、こっち側か、満足していますかとか、例えば、思考能力を、学校での授業や活動が今後の自分のために役立ちますかという中に、どかんと88.4%が役立ちますと書いてあるんだよ。ところがさ、設問をよく見てみてよ、「そう思う」というのなら、私はこれが43%というのはすばらしいと思う。ところが、もし課長が、どちらかといえばそう思うというふうに、これはどう捉えるかという問題なんだよ、私と思うに。例えば、課長さん、ビールとワインどっちが好きなんですかと聞かれたときに、どちらかといえばワインですかねと言ったら、答えなきゃならないから答えるということでしょう、これ。違いますか、これ。へ理屈じゃないよ、これ。ちゃんと国語辞典か何かに出ているよ。どちらかといえばというのは、答えたくないか、どっちを選んでいいか分からないときに使う普通の言葉なんだよ。今言ったように、お酒は私、飲めませんというのだったら、どちらかといえばワインですとかというような形に私はなると思う。そういう中に、突然88.4%という、ある意味ではグレーみみたいなものをやりながら、それを今度ももっともっと上げていきましょうというよりも、このどちらかといえばというような人たちの、これはどういうような形で出ているのかというようなことをまず調査したり、中を見なかったならば、なぜそう思うと言えないのか、ここのところから、私は本来だったら、そういうように思わないというような人たちを、どれだけそう思うというところに持っていくかと、数値というのはここに出てきて私は当然なんじゃないかと思うのよ。そういう在り方が、本来のこのあなた方が言っているグランドデザインって、それこそベーシックな、要するに黒岩さんもひっくるめた黒岩県政のものなんでしょう。これは、教育委員会もひっくるめた、そういうものがどこにも出ていない、いや、どこにもと言っちゃいけないんだ、絶対どこにもと言っちゃいけないね、出ていないんだよ、あまり。

もう一つ、また言いましょうか。例えば、この教員の候補の応募倍率についてだって、最後まで3.6と、どうして3.6なの。だって、本来なら、これは少し上がっていきゃおかしいじゃん、施策を言うんだったら。何で3.6なんだろうと思うのと同時に、働き方改革とかいろんなものをおっしゃるけれども、それがなぜ神奈川県に来ないのかということが前提となって、ここのKPIになって、だからこうなりますという論理立てをしなかったら、これほど無謀な、

要するに、計画ってないじゃん。どう思います、課長さん。

◎高校教育課長

まず、インターンシップについてお答えをさせていただきます。

インターンシップは、生徒一人一人の職業観、勤労観を育てる上で有効な取組ということで、進路が進学である、就職であるということにかかわらず、卒業後、自分がどのように生きていくか、そういったようなところと関連させて行うキャリア教育の中で、より多くの生徒がインターンシップを体験することで、自分の職業適性や将来設計について考える機会とすることができると考えております。そのことで、インターンシップをより多くの生徒に体験してもらうことで、キャリア教育の充実につながるものというふうに考えています。

また、地域によって企業があまりないのではないかということなんですけれども、企業だけとは限らず、例えば、保育所であるとか、病院であるとか、また、県庁でもインターンシップ、やっておりますので、様々なところで生徒に体験的に学んでいただく、また、委員おっしゃるように、専門学校がやっている仕事の学び場のほうも、なかなか生徒が集まらないということを私どもも承知しておりまして、広報のほうは毎年行っているところなんですけれども、目標を設定いたしましたので、なるべく多くの生徒が体験的な学びを通じてキャリア教育、充実させていけるように取り組んでいきたいというふうに思っております。

◆鈴木ひでし委員

いや、課長さん、そんな何か教鞭みたいなこと、別に答えてくれなくたっていいですよ、私、言っていること分かるから。でも、私が言っているのは、ここに出ていて1万人というような目標を立てて、わざわざグランドデザインに載せて、それが何、私からすると、何に教育の4年後に関係あるんだと。例えば、インターンシップだって、これからどんな景気になるか分かりませんよ。ひょっとしたら進学だって少なくなるかもしれない。その中に、インターンシップ1万人というような目標をクリアしたから、何が私は変わるんだろうと思うと言っていることよ。いや、課長の言っていることは、それは否定はしません。だって、全てにわたって教育の中に駄目だというのはないんだから。けれども、なぜそんなことをしてまで、例えば、進学校の方なんかは朝から晩まで一生懸命受験で勉強していた中で、ここでインターンシップとかといろいろ入れながらも、それは授業等々で学ぶでしょうし、自ら親かもしれない、それをわざわざ県の教育委員会がこういう目標を上げることによって、そういう人たちの部分に上から傘をかぶせないかと私は心配しているわけよ。進学を一生懸命やっている人たちに向かって、インターンシップは大学だって別にできることであり、それをなぜこんなわざわざこの一番上のK P Iに、こんな1万なんて設けているんですかというのが、私の真の要するに質問ですよ。悪くはない、絶対悪くなんかないですよ、教育の皆さん方がやっていること、私、否定なんかしませんよ。そうじゃなくて、何でなんですかというのが、この私の言っているこの1万人というようなところを出したのは何なんだと、逆にも

っとあるじゃないかと。例えば、インターンシップじゃなくて、就職を目指している方々に対しての割合というようなもの、例えば補助をするとかというようなものや、いろんなものがあるじゃないですか、ただ進学というだけじゃなくて。そういうようなものも、こういうようなところにあっても私はいいんじゃないかと、そうだったらというようなことです。分かりました。ここが私、一つお聞きしたかった。

二つ目には、私ここを見ていて、二つ目に思ったことは、いろいろなことがいっぱい書いてあって、ロジックモデルとかいろいろ書いてあるんだ、この中に。K P Iに向けたロジックモデルとかと、こういうふうに書いてある。私、この中でインクルーシブ教育もひっくるめて、いろんな要するに、この中でも書かれているけれども、もっと基本的なことについてしっかりとした手を伸ばしていかないと、4年後また同じことがここに書かれていることにならないかと心配しているの。その意味で、ちょっとお聞きしたいんですけども、この過去の、この前の、令和5年までの前の4年間だったのかな、そこの総括というのはどこに書いてあるんですか。要するに、これを進めてきて、どこまで教育現場というようなものは、ロジックモデルも何も結構だけれども、どういうふうになったのかという、この結果ってどこに書いてあるのかな、課長さん。

◎教育局企画調整担当課長

実施計画自体には、そこの部分は書かれておりませんが、昨年度までに決まっておりました、前回の計画の総括についてはここでなされて、それを踏まえた形で今回の新たなグランドデザインをつくられているというふうに認識しております。

◆鈴木ひでし委員

何か分からないですけども、言っていることが、半分。私は、そういうものを踏まえた中で、こういう新しい指標でありたいとかとならなければ、その都度その都度、総括がない中で、こういう申し訳ないですけども、私からすると、これを見たからと将来に希望を持って4年後大丈夫だと私はならないと思いますよ。これは私自身の感想です。子供たちや、また皆さん方が、教育委員会として市町村の方々に対しても、これだったらかゆいところに手が届いてやってくださるというようなものがここに出てこなければ、私はならんというふうに思っているわけです。

あわせて、ちょっと先ほど、渡貫さんのほうに戻すけれども、何だっけ、この人、働き方何とかとあるじゃない、これ。K P I一覧表とか、いっぱいいろんなのがあって、どこを聞いていいか分からないんですが、131 ページのコンソーシアムサポーターと書いてあるんですよね。課長、私ちょっといろんなところを見て思うんだけど、私も時たま横文字を使うんだけど、コンソーシアムサポーターって私知らなくて調べたんだけど、あまりこういうのは横文字をいっぱい使わないほうがいいんじゃないですか。ごめんなさい、ちょっと解説聞かせてくださいな。

◎高校教育課長

コンソーシアムサポーターは、県内 10 地区に各 1 名、10 人、会計年度任用職員として配置しておりまして、地域のコンソーシアムの形成、それからインターンシップ先の開拓とか調整とかを行っているというお仕事をしていただいている方なんですけれども、委員御指摘のとおり、コンソーシアムサポーターという片仮名の職名になっているんですが、コンソーシアムの形成をしていくということを、その方たちにお仕事としてやっていただくということで、コンソーシアムという言葉を使っております、その地域をサポートする方ということでコンソーシアムサポーターというものになっております。

◆鈴木ひでし委員

私は、毎回私言うけれども、ここの現場で議員と皆さん方が話をするための資料だったら、やめたほうがいいですよ。県民の方が見て、コンソーシアムサポーターって説明でも聞かないと、私が分からなかったのかもしれないけれども、至るところに、今回のインクルーシブのフルもそうだけれどさ、そうなってくると、私は、しっかりとした現場の県民の方に見ていただく、そういうものをしっかり踏まえた上でやっていただきたいということを、ひとつお願いしたいというふうに思います。

次は、この情報化等何とかがっていうのあるじゃん、神奈川県学校教育等情報化推進計画、ここに入る前に、ちょっと私、先行会派の方々もみんな何か Gmail のことをお話ししたので、私はちょっと懸念をすることを 2 点ほど聞かせてください。

そもそもがこれはベンダーというか、要は、ここに何か富山じゃない、どこだっけ、いるところに委託をしたと。私は、今回のこの事業というのは、何もこの業者だけが悪いんじゃないと思っているんですよ。では何なのかというと、私の方で調べました。そうしたら、これはあれなんだよね、24 年の 2 月 1 日付でもってグーグルから、要するに、5,000 発以上のもを出したときというのは迷惑メールに入りますよという通知が 2 月 1 日前に出ているんだよ。ということは、もうそもそもが、たしか去年の 10 月頃かな、そういうルール改正が行われますよというのがグーグルから出ているの。私もあれを見ていて、いや、ヤフーとグーグルやめちまおうかなと思ったぐらいだったんですよ、Gmail。

その中で、私が心配したのが起こりました。たしかあの中に、10 日間ぐらい、皆さん方はこの Gmail の問題でもってブランクがあるよね。このときに、デジタル推進本部とかというのがあるじゃん、そことあなた方が何度も要するにミーティングをしていたの、10 日間も。それで 1 回そこでもって Gmail は直りましたといって、もう一回なったというときに、私すごく心配したのは、抜本的なグーグルの規則変更というのは分かっていないで、ずっとさばいていたんじゃないか、すごく心配した。それを、取りも直さず、前から私言っているように、神奈川県の県庁の中に、委託、委託とやるのはいいんだけど、委託した側が分からないと、私はその現状をすごく憂いているの。そうじゃないかもしれません、失礼だったら許してください。

要は、問題が起きました、どうなんですかとベンダーに投げる、ベンダーから返ってきたことが分からない、こっちも、ということが今この県庁の中で起っているんじゃないのか、それは取りも直さず県庁全体の問題として、ICTだDXだとか言っているけれども、全然そんなところにおぼつかない、要するに、ICTに関わる知識不足や、またそういうスペシャリストがいない現状を私は映し出しているんじゃないかと思って、実は、皆さん方のところ、よく頑張ったと私は思っているんですよ。このところ、正直にどうですか。どんなことが話し合われて、どんなことがあったんですか。今さらもう終わっちゃったんだから、正直なことを言って、正直にもうお話ししましたと、それで終わって構わないんだけど、私が心配したのは、そういうグーグルが、去年の10月だったと思うんだけど、規則変更しますよということさえも分からない、そういうような、一つには業者の問題もあると思う、確かに。けれども、全てのこういう失礼ですが、IT関係に関わる業者の方というのは、何かが優れていても何かがやっぱり劣っているんですよ、今の現状は。そう見てみると、ただただベンダーが悪いとだけ言えない、私はそう思っているんです。その中で、皆さん方が10日間ブランクが空いた、それでまたもう一回駄目だったという中で、実は今、私がお話しさせていただいたグーグルの規則という、基本的なことが分からないで右往左往されていたというふうに思うんですけれども、いかがですか。

◎高校教育課長

1月9日に不具合が起こって、1月9日の時点では何が原因かということは我々では分からずに、システム開発業者のほうに調べてくださいという形でやっていたんですけども、グーグルが厳しくなるということは、承知はしていましたが、それを踏まえても、なぜメールが遅れたり届かなかったりするのかという、ここを直せば直るというものというのがやっぱりなかなか分からなかったという状況です。オンラインの会議でそのシステム開発業者、それから教育委員会、我々のところだけではなくて、総務室のICTのグループの担当者、それからデジタル戦略本部室も入っていただいて、それからまた、途中からは大量のメールを送信したりしているメール配信業者に入っていただきまして、その方も一緒になって、それから、一緒にシステムを運用している横浜市、川崎市、横須賀市の担当を含めて、Zoomで会議を行いながらシステムの開発の進捗管理と運用というのをやってまいりました。ですので、そのトラブルが起きてから、もう毎日、午前、午後、夜というような形で対策を協議しながら、ではこうしてみよう、こうしてみようということをいろいろしながら、改善に向けて対策をしていったという状況でございました。

◆鈴木ひでし委員

それ以上聞いてみてもしょうがないので、私もあれですが、本当に私が思うのは、やっぱりもう一度、これはもう前に並んでいらっしゃる幹部の皆様方をお願いしたいんですが、やっぱりICT、ICTとは言っている、こちら側のノウハウというのをしっかり持った上で業者との委託契約と、また日常の割

り振りをしないと、大変に怖い時代が来ましたよと、ささやかな、昨年の10月あたりにグーグルから出したそういうようなことによって、こんなトラブルになっていくんだというようなことを私すごく心配したので、そのところをひとつ今後とも見た上でもって、職員の方々のやっぱりICTに対するサポートというようなものは、口先だけじゃなくて、しっかりとしたまた予算もつけた上でしていただきたいということをお願いしたいと思います。

その中で、これを拝見しました。まず一つには、だらだらと物すごい長い文章が書いてあるわけよ。何を書いてあるのだから私分からないの。私の読解力がいけないのかもしれないけれども、例えば、この中に出てきているのを見ていて、例えば、働き方改革とICTとか、もう一つは、その後に出てきている目指す児童・生徒の資質・能力とかと、こういうようなところ、読めば読むほど、Society 5.0だ、またこんなことをやりますとかとどんどん書いているけれども、体系的にどんなことになっていくのというのがここから分からないのよ、私。これは私の読解力不足だったら許してください。ところが、失礼ですけども、私もこれは職業柄、議員としてこれは読んだんですけども、そうじゃない方が見たらば、これは何を言っているんだろうと、私、多分、字面の途中でもってやめちゃうと思うんだよね。まずは申し訳ないですけども、5ページぐらいまでだっけ、あと、6ページ、7ページ、8ページぐらいのところまで、これは一度何らかの形できちっと、ポンチ絵入れたような形で分かりやすくしていただけないですかね。

◎教育局総務室長

こちらの情報化推進計画の構成につきましては、これは実は国の計画がございまして、こちら、法律のほうで都道府県、あと市町村のほうに策定義務が、努力義務なんですけれども課されています。その際には、国の計画を参考にするように、基本とするようにというふうな形でなっております。この国の計画も見ていると、先生言われるように、文字でだらだらとということで、そういうような形になっています。それを参考としたほかの都道府県の計画も、やはり国を参考にするようになっていきますので、国の体系になぞらえる形で同じような形になっています。私どもも同じようにといいますか、学校教育の情報化の方向性について、国の計画と同様に、現状と課題、基本的な方針・施策について大きく柱立てをさせていただいて、その中に、先ほど委員御指摘のように、児童・生徒の資質・能力ですとか、教職員のICT活用指導力、そして教育の情報基盤の整備ですとか、あと、情報化に向けた体系整理ですとか、そういったことで項立てをさせていただいております。

先ほど委員御指摘のように、文章だけで構成していることから、一般には読みづらい一面というのはあるかと思います。計画、今、頂いた御意見を踏まえまして、計画の概要版を別途作成するなど、分かりやすいものを、伝える工夫を今後、検討していきたいというふうに考えています。

◆鈴木ひでし委員

ちょっと私、もう一つついでにお願いしたいのは、この1ページを開けると、

そもそもが、この計画そのものの自体が神奈川県委員会、ICT推進指針というのを統合して、これが推進計画になったと書いてある。そうすると、今ここに出てきているいろんなことが書いてあるものの前の段階でのものがあって、今回、私不勉強でそっちのは見ていないんです。ところが、そことの兼ね合いをただこの一、二文でもって書いてあるけれども、そもそもが今までのここに書いてあるICT推進指針というものに書かれていたものと、この計画によって何が変わって何をしたいのかというようなことが、ここからどこにも書いていない。ということは、私、ある日突然、何で読んでいなかったのかというと、この推進計画というのは、初めて出てくるんだろうと思ったんだけど、まさかその指針との兼ね合いがあるんだとは思っていなかったんですよ。これについても、例えば、当たってじゃなくて、現状と課題なり何なり、そのこのところにしっかりとした1ページぐらい入れて、その兼ね合いはきちっと書くべきだと思いますけれども、いかがですか。

◎教育局総務室長

ICT整備指針というのは、ハード整備、これまでの情報機器の整備を中心に策定した指針でございます。こちらが、今回の学校教育等情報化推進計画というのは、ここに教育というところがございまして、教育のアイデア、子供たちをどうしていきたいのかという、どういう教育をしていきたいのかという、分かりやすく言うと、ソフトの部分が多分に書かれています。今までの整備指針のほうは、どちらかというとハードをどうしていくのか、パソコンを何台調達していくのか、ネットワーク整備をどうしていくのか、そういったところを書いていた指針ですので、今回の情報化推進計画の中に、そういったソフトの部分とハードの部分、それを取り込んだ形で今回策定をさせていただいたというようなことでございます。

今ちょっと委員のほうから、そういったところも単に一元化というような言葉が分かりにくいというようなところがございますので、その辺も、例えば、附属の資料ですとかそういったところに、分かりやすくその辺の経過みたいなところを書くような形で工夫していきたいというふうに考えています。

◆鈴木ひでし委員

せっかくそこまでおっしゃるんだったら、そんな付録とか言わないで、それは1ページなり何なり、それを入れなきゃおかしいでしょう。今、初めて聞いて、私はもうハードのことが書かれていたんだと、不勉強ですみません、ハードのことが書かれていたので、今度はハードとソフトを入れた形でつくりましたよというような一文がなきゃおかしいじゃない、最初に。

◎教育局総務室長

その辺、工夫させていただきたいと思います。

◆鈴木ひでし委員

よろしくお願いします。

その中で、これをずっと拝見していた中で、私ちょっと一つ心配したことが、9ページにある文科省がやっているマネジメントシステム、LMSと、またメクビットが書いてありました。これは当然、何か私からすると当たり前のことのように使われているんだと私は思いますけれども、この市町村の使用状況とはどんなものなんですかね。

◎子ども教育支援課長

全ての市町村立中学校におきましては、メクビットを全国学力・学習状況調査の解答に使用しています。そのほか、多くの公立小中学校で、他の場面でも活用が進んできているというふうに認識をしています。

◆鈴木ひでし委員

他の場面でもってどんな場面よ。

◎子ども教育支援課長

メクビットは、全国学力・学習状況調査の過去の問題や、あと、地方公共団体が作成している問題等が蓄積されているデータバンクのようなものでございます。それを、登録している学校の教員が受け取って、それを当該校の児童や生徒に提供し、授業や家庭で活用する、そのようなものでございます。そういう取組が、各小中学校で進んでいるというふうに認識をしています。

◆鈴木ひでし委員

課長、今の中で私すごく気にかかったんだけど、1人一端末持っていらっしゃったら、この要するにメクビットに、じゃあ、家庭からでもアクセスできるの。

◎子ども教育支援課長

登録している学校の教員が子供たちに、そういうふうに提供をし、かつその学校や自治体が子供たちの1人1台端末の持ち帰りを認めている場合、その場合は、家庭で子供たちがそこにアクセスをして問題を解くということは可能であると認識しています。

◆鈴木ひでし委員

いや、私は、ここまですべてなっているんだと、また、現場の要するに教職員の方とお話ししたときには、意外と知らない方が多いです。おかしいですかね、私の言っているの。私が心配しているのは、こういうようなことを、元気にあなた方は、あなたが書いたんじゃないんだろうけれども、この何だ、推進計画にこんなことを平気で書いているけれども、果たしてそれを教育委員会としての字面で書けばいいけれども、現場はどうなっているんだということをすごく心配したということよ。それで、一番最初にお話し申し上げた政令市と、失礼ですが、小さい町村とかと言われるところと、そういうある意味で、こういうICTの中で不公平が生じていないか、教育現場で絶対にあっちゃいけない不

公平が生じているんじゃないかと、それをこんなことでもって元気いっぱいに書いているけれども、大丈夫なんですかと私は思ったということよ。どうですか。

◎子ども教育支援課長

県教育委員会では、政令市も含め、市町村教育委員会のICT担当の指導主事を対象とした会議体を年間複数回、開催しております。そうした中で、特にこのメクビットについては、今後、活用することが有効であるというふうに考えておりますので、メクビットを活用した指導事例や、また学びの状況等を、先行事例等を共有をして、また、そうしたことで、もっとよくするためにはどうすればいいかということを経験することを通して、各市町村教育委員会の取組、また、各学校の学びの充実を支援しているところでございます。

◆鈴木ひでし委員

課長ね、私は、繰り返すようだけど、ここでこういう論議をしているんだけど、現場に行けば行くほど、ICTは遠いような存在に私は思えてしょうがないのよ。それで、わざわざこれを全部、ちょっとどうなっているんですかとお話しさせていただいた。私もこれからまたお付き合いさせていただいている方々にはこの情報を流していきますが、しっかりとしたこういうような流れの中でも、ICTとかDXとか、もう県庁中飛び交っているけれども、どこにそんなのがあるんですかみたいな思いは私もしているわけだよ。それがやっぱりこういう計画一つ見たって、現場のところに行っているんですかと、こういうことについてはきちっとした調査をする、それでやっぱり対応はどのようになっているのかというようなことに対して、目配せをひとつよろしく願いをしたいというふうに思います。

最後に、私このかながわ読書のススメ、福沢諭吉じゃないけれども、ススメですよ。これを見ていて、私あれっと思って、ああこういう感覚なんだなと思って見させていただいて、最初にちょっとお聞きしたいのは、この中に出てきている、よく何か新聞でも出ている1日読書量が10分以上だあだこうだと、読書量が足りない足りないというけれども、そもそもどんな調査なんですか、これは。

◎生涯学習課長

今回の第5次の子ども読書活動推進計画における調査につきましては、国の全国学力学習状況調査において、子供たちの読書量を、平日も1日10分以上読書をした子供たちの数をカウントした量でございます。

◆鈴木ひでし委員

私は、こんな言い方はいけないのかもしれないけれども、時代がこれだけ変わっているのに、何でこうやって読書ってこういうような捉え方しかないんだろうと、私は正直に言って少し憤りを覚えていて、今の現場の要するに学生さんたちは、本の読書をやろうといったってそんな環境整っていないじゃない。

私、先日この読売新聞の、いつだこれ、3月5日の火曜日だよ、国もいよいよ、私も前から言っていたんだけど、書店の振興プロジェクトというのを、要するに大臣直轄でもってプロジェクトチームを始めると、読売新聞は一面に出ていた。私もそのとおりだと思う。だってさ、どんどんどんどん書店が地域からなくなっていっているんだよ。たしか私も、結構当時はまだ田舎だったので、田舎の高校で、いや神奈川県ですけれども、私学に行っていて、中山駅というところに書店があって、よく電車が来る、当時、横浜線だったものですから、もう下が本当にぼろぼろの電車でもってなかなか来なくて、単線だった時代なので、その頃よく書店に寄っていましたよ。でも、書店がないもんね。ここにまず、そもそもさ、課長、調べてもらっているかどうか知らないけれども、そもそもが33市町村の中に、書店が全然ないなんていうエリアがあるんじゃないの、どうですかね。

◎生涯学習課長

私どもの調査ではございませんけれども、一般財団法人の出版文化産業振興財団、こちらの調査によりますと、本県で書店がない市町村数は6であるとしています。

◆鈴木ひでし委員

そういうことなんですかね。私は、この中で見ていて、本当にそんなに長く課長とやり取りするつもりはないんですが、数点、要望も交えながら、ちょっとやり取りさせてください。

一つは、書店がないということをどう捉えるんですかというのが、ここには書かれていない。要は、環境も整っていない中に、学生に読書しないだああだこうだというようなことが言えるのかと、一つは。

二つ目には、図書館だって、失礼ですが、私の住んでいる鶴見区だって、そんな大きな図書館じゃないですよ。青少年センターの話をよくするけれども、あそこの青少年センターのところにある県立の図書館なんですけれども、あそこまで来るのに、例えば西の方々だって大変な交通費を使って来るんだったら、本買っちゃったほうがいいじゃない、だって私そう思いますよ。そういう環境の中で、やれ読書しないだのどうのこうのという、本当にこういう何かレポートを見ると、私はちょっとすごく学生さんがかわいそうだなと思うのが一つあるので、課長、ぜひともひとつこういうようなインフラを何らかの形で書いていただいてもよろしいですかね、この中に。図書館も書かれているけれども、やっぱり書店等々というようなものを明記すべきだと思うんですけれども、いかがでしょうか。例えば、そういう環境というようなものをつくっていくなり、つくっていくべきだみたいなものはどうでしょうか。

◎生涯学習課長

子供の読書活動を推進していくには、もちろん子供にとって身近な場所で読書をする、あるいは読書に関わるような環境をつくること、これが大事であります。そのため、子供の周りにいる大人、これが協力をして子供の読書環境を

つくっていくことが大事だと。今、委員から指摘のありました書店も当然その環境の一つではありますけれども、そういった書店がない市町村、これも実際にあるようでございますので、まずは通っている学校図書館の充実などにより読書に親しんでいただく必要があるかなと。そういった意味で、この計画には学校図書館の充実、こちらを盛り込んでおりますので、これによって、それを含めて関係機関等と連携した取組を引き続き続けてまいりたいと考えております。

◆鈴木ひでし委員

課長が今そういうふうに、多分私答えるんだろうと思った。だけれども、このところに、読売新聞にあるように、本当かどうか知りませんよ、大臣直轄のPTが出てきて、書店等々のニーズが高まってくるようになれば環境も変わる。私は、その中でもってなぜなんだろうと思うのは、課長さんさ、ここを見ていると、取組の成果と課題って6ページからスタートしているじゃない。ところがさ、何で課題だけ半ページしかないの、成果ばかりこんなにいっぱい書いてあるけれども。要するに、あなたが課題というのを持っている中に、私が今わざわざ書店というようなものがないんじゃないかということここに入れたけれども、ここになんか書いていないよ。何でこれ書いていないの。課題だけ何で半分で、あなた方こんなにやりました、こんなにやっていたら変わるでしょう、これ。変わらないじゃん。だから、それをどうするんだという課題を明確にしなかったら、第五次の計画のところに行かないでしょうと私は言いたいわけだよ。半分しか書いていないの、ここを見たら。だって自分のやったことをいっぱいやったら、成果がもっと上がって、五次はもっと高くなりますというけれども、そんなに変わらないというんだったら、何がいけなかったのかというのが一番大事なんじゃないの、これ。課長、どうですか。

◎生涯学習課長

第四次計画までの課題につきましては、目標を達成できなかったこと、これそのものが課題だというふうに捉えております。そうした中で、効果があった取組として数字で表せるものを、この第五次計画の案で明記させていただいたところでございます。

◆鈴木ひでし委員

そうおっしゃるのだったら、では、逆にできなかった理由は何なんだ、分からなかったらその先に進まないじゃない。できたのはこれでできました、それは結構。では、なぜできなかったんですかというものが、もっとこの中にブレイクダウンしていきやいけないじゃない、だって。おかしくないでしょう、私言っていること自体が。私、何も難癖つけているんじゃないよ。だって、そういう反省から次の計画に行くんじゃないの、人間って。それもなしに、いきなりこれをやったんだから、こういう成果がありましたけれども、あとはもうこういうのなのでなんていうのは、それは失礼ですけども、企業だって絶対そんなことは許されませんよ。どうですか。

◎生涯学習課長

第四次計画で立てました目標に達しなかったことにつきましては、例えば、令和4年度の本県小学生の読書量につきましては、コロナ禍以前よりも5ポイント減少しております。これに比べまして、全国平均でも6ポイント減少しております。逆に、令和5年度においては、本県も全国も読書量のポイントはアップして増加していますので、読書量の低下というのはコロナ禍が原因かと考えられます。そうした中で、今後、第五次計画については、これまで第四次計画で取り組むべき項目に加えまして、第四次計画を立てた後、直近5年間で社会状況の変化に応じた取組を加えていくことで、読書量の向上を目指してまいりたいと考えております。

◆鈴木ひでし委員

課長さん、論点ずらしちゃ駄目だよ。だったらコロナと書きなよ、ここに。書けばいいじゃない。問題は何なのかと私は聞いているんだよ。それをあなたは、コロナだったらコロナと書けばいい、そうしたら私、納得するよ。ところが、この後の五次、六次のとき、どうなっているかによって、あなたの論理は崩れるよ、それは逆にそうじゃなかったら。そうじゃなくて、ここのところで県民の方が見たいのは、何ができなかったからだ、では、コロナ禍だったらコロナ禍の何がいけなかったのよ、これ。コロナ禍で何がいけなかったの。要は、外に出られないから、外に出られないんだったら家の中で読めばいいじゃない、逆に読書量は上がるはずだよ。そういう理屈だって成り立つだろう。

◎生涯学習課長

コロナ禍でできなかった取組と考えられるものの一つとしまして、学校の図書館での読み聞かせ、あるいは朝の一斉読書、こういった取組が行えなかったというふうに承知しております。それらの取組は、読書に本来あまり親しみのない子供たち、小学生たち、こういった子供たちに対して影響を与えるようなことがあったのではないかと考えております。

◆鈴木ひでし委員

課長がそんなことをおっしゃるんだったら、そもそも主体性を求めてこれでやるんだったら、インフラができないので駄目だったら、インフラだってもっともっと違う形でもって、何らかのこういうふうにすればいいじゃないかと、どんどんどんどん拡大していくよ、あなたの論理を持っていくと。私の言っているのは、人に見せるんだから、これを。あなたのこれでやれというんだったら、私はいいよ、別に。そうじゃなくて、県民の人が、何が足りなくてこうなったのかという起承転結がなかったらおかしいでしょうと私は言っているの。これだけの成果をやりながらいかなかった、では、コロナ禍だ、コロナ禍だったゆえに、これこれこういうこととここに書かれていなきやいけないでしょうと私は言っているのよ。どんどん時間が過ぎていって、あなたと別に会話しているわけじゃないわけだから、これは議論しているんだよ。あなたがここのと

ころを、もっときちっとしたものを課題として書くというようなことで言うてくれないと、これ収まらないじゃない、だって。

◎生涯学習課長

コロナ禍を原因として、今回の読書の計画の目標に達しなかったというところにつきましては、今回の第五次の計画の冒頭「はじめに」の欄で、コロナ禍の影響のことについて触れておりまして、この文をもって目標を達しなかった原因の一つというふうに捉えております。

◆鈴木ひでし委員

あなたの言っていることは、どこかに書いてありましたというのを私聞いているんじゃないんだよ。章立ての中でもって、きちっと課題というのはどこなのかということを書いたらどうなんですかと私は言っているわけ。分かりました。そこまで強弁されるんだったら、私も時間があまりないから、最後にしましょう。

この中で、私がすごく心配になったのは、ここの読書読書とあなたおっしゃるけれども、この中でもって見ている中に、16 ページの2 番の「デジタル社会に対応した読書環境の整備」というところにあるけれども、そもそもが、私、聞く読書というのがあってもいいと思っているんですよ。聞く読書、何なのか。オーディブルだったりポッドキャストだったり、S p o t i f y、そういうようなもので聞いている人は今いっぱいいますよ。実際には、NHKのらじるだっけ、あれだってもう名作が、羅生門とかいっぱい入っていて、結構私も時たま聞くとときがあります。こういうようなものが、ある意味でこのデジタル社会に対応したと書いてあるのなら、もっと指標として聞いている人たちの、要するに環境整備もひっくるめて、こういうところはきちっと入れていくべきだと私は提言したいわけ。それがなくて、読書をしていない読書をしていないと、私はそう思わないんですよ。やっぱり皆さん、それなりの勉強は一生懸命していらっしゃる、そこのところをちょっとサポートする形で、そういう環境を入れればこのスローガン一つにしても、友のそばにだけじゃなくて、オーディオというようなものを入れた形でのスローガンがあっても私はいんじゃないかと思えますけれども、この二つ、いかがですか。

◎生涯学習課長

オーディオブックにつきましてはですけども、本計画におきましては、重点取組の一つに、今、委員御指摘のありましたデジタル社会に対応した読書環境の整備を始めている、この中の項目で、電子書籍やオーディオブックは、子供が読書に関心を持つ手段として有効と明記いたしました。また、スローガンにつきましてはですけども、スローガンの中で触れている本につきましては、当然、電子書籍やオーディオブックも含むものというふうに考えております。

◆鈴木ひでし委員

よく御検討いただいて、よろしくお願ひしたいと思ひます。以上です。